

竹に関する随想

田 川 隆

先般、思いがけなく札幌でベトナム中央歌舞団の踊りをみる機会があった。ベトナム西原地方の少数民族の踊りという「ロンチェンの踊り」に幕をあけ「竹踊り」で幕を閉じるまで、まことに感興深い歌と踊りであった。

そのなかでとくに私の興味をひいたのは、大から小へ、十数本の竹を木琴のようにひもで連らねた「トルン」という民族打楽器と「竹踊り」であった。そしてふと以前、テレビによる歌舞伎の中継放送で、ベトナムの竹踊りに似た日本調の竹踊りを見たことを思い出した。

この竹製の打楽器といい、竹踊りといい、これらはきわめて東洋的なものでおそらく西欧ではみられず、また、彼らはこの竹にこれほど関心をもたないであらう。東洋人が、なぜこのように竹に興味をもつかは私自身ただちに答が出せないが、広い意味での生活の知恵であり、日常生活の身辺にあるものを素材として、楽器に、踊りに、実際的には生活そのもののなかに竹がはいりこんでいるものであらう。

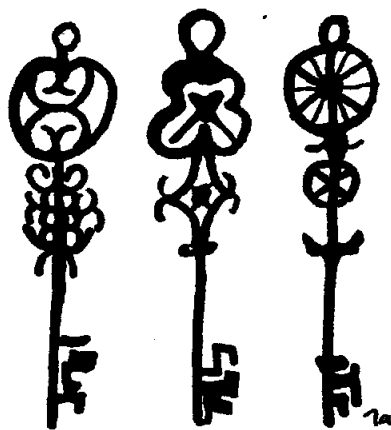
日本人がどこからこの日本列島に移住してきたかは、学者間でいろいろ難か

しい議論があるが、私はこのベトナムの踊りを見ながら、日本人の血の中に東南アジア系の人の血が多く流れていることが感ぜられた。

§

私が札幌に移り住んで早や四十数年も過ぎてしまい、いまや北海道人になり切っているつもりであるが、それでも北海道の風物になじみきれない部分があるのは、こちらであの温和な竹の緑がみられないのもその一つである。もちろん竹の一種としてネマガリザサなどは見られるが、あの南風にそよく繊細な竹の梢、竹の緑がみられないことは、南国に生まれ育った者としては、淋しくものたりない感じがする。

日本の南国をかざる風物は、竹を除いては考えられない。まず、お正月の門松の松竹梅にしても、府県の風景に占める竹の役割りは大きく、そしてこれが日本人の情緒の中に深くとけこんでいる。このことは、日本人の日常の生活の中に出てくる竹に関係のある言葉からも推察されよう。たとえば「竹の柱にカヤの屋根」とか「竹馬の友」とか、「竹を割ったような」サッパリした人柄



また「木に竹を接いだような」とか、このような例は「雨後の筍」のようにあげられる。

むかし、雲上の姫君たちは具竹寮に住まわれたと聞くが、この寮の名は、昭憲皇太后の御製

人はただすなほならむ具竹の

世にたちこえむふしはなくとも

に由来するものであろうか。

このように日本人が竹をめめるのは、形がまっすぐで節が正しく、寒さに耐えて変わらない性質を愛したことだろう。中国では竹は君子、処子、抱節君など異名があり、竹を愛した一古人が「何ぞ一日として此の君なるべけんや」といったことから此君（しくん）の雅名もある。日本の松竹梅と同じように中国では、蘭、梅、菊とともに竹を加えて四君子ともいわれた。

また、科学と竹との関係については、日本人としてつぎのことは忘れてはならない。いまだでは電灯というネオンランプのことであるが、以前はタンクス・テン電灯であり、その前は炭素線が電球のなかでくると一廻りしている電球が使われていた。

この炭素線は日本の竹からつくられたもので、最初、アメリカのエジソンによって明治十三年につくられた。金属線電球に失敗したエジソンが炭素繊維の研究を行ない、木綿から炭化糸を得られるようになり、さらに植物繊維から炭素線が得られるようになった。かくして六千余にあまる植物の繊維のうちから、竹を探しあてたのである。

エジソンが炭素線に用いた竹は、日本の山城の国、石清水八幡宮の苦竹だといふ。この竹はむかし、多量にアメリカに輸出された。明治十三年から約十年間のことである。いま同神社の参道の西側、宇治川、淀川の清流をのぞむ景勝の地に、エジソンの記念碑が建っている。二月十一日はエジソンの誕生日なので、竹にゆかりのこの石清水八幡宮ではエジソン生誕祭が行なわれると聞く。

§

ところで、英語にバンブーという言葉があるが、それを日本語でタケと訳し

ている。日本の竹をバンブーであると、普通一般の人が思っている。ところがこのバンブーは熱帯地方産の竹類であって、日本の竹とは相当縁の遠いものである。ビルマ、ベトナムに産するバンブウサの一種は、高さ二五メートル、周八〇センチに達する。

この竹林が猛火につつまれると大爆音をたて、マンブー、バンブーと怒号するようであるので、マレー半島のマラッカの土人がこの巨大な竹類を総称してマンブーと呼び、いつの間にか語呂が変わり英語のバンブーになったという。

その後、この名が欧米各国にひろがり、多少の語尾変化をしているが、語幹は同じバンブーである。今日使用している学術上の名称も、南洋地方に野生する竹類をさしてバンブウサと呼んでいるが、これはバンブーに女性語尾をつけてラテン語化したものにほかならない。

これに対して日本の竹は程が小型であるばかりでなく、長い鞭根があつて地中をはい、ところどころから筍が生える性質があり、地震の国・日本に好適の竹類である。また、寒さにも抵抗力がある。

ところで竹、笹の類はほとんどその大部分が日本の特産である。竹類の研究の歴史を文献についてみると、三つの時代に分けて考えることができる。第一期は本草時代で、上代から徳川時代末期までである。第二期は基礎研究時代で明治、大正から昭和の中葉までで、第三期は科学的考察時代で昭和の中葉より今日までである。

まず日本における竹研究の最初は、中国の影響を受けたことは疑いがない。たとえば、李思齊の竹譜詳録、張漸山の竹譜などを日本の本草学者が利用し、これに基づいて、日本でも竹に関する書物が一七一七年以降、種々発刊をみるにいたつた。一方、実用的には竹の果実は食料となるのみならず、何年間も保存できるので、救荒食糧として研究された。

ついで基礎研究時代にはいると、ツンベルグはフロラ・ジャポニカ（一七八四）を発表して学問的に日本の竹を欧米に紹介し、つづいて東印度会社の医官シーボルトも一八二三年から二九年にかけて長崎にあり、氏の著書の中にも竹に関し二〇種余の和名、ならびに利用法を發表している。これらにつづいて多

くの外国人により、日本の竹に関する報告がなされている。

他方、日本人ではじめて竹を研究し、学名をつけたのは宮部金吾であり、チシマザサを明治二十三年（一八九〇）に発表されている。北海道、樺太、千島の北方系の笹の研究は主として館脇操により行なわれ、これにより北方の笹が大いに明るくなった。ことに館脇は北海道林業会報第三十八巻（一九四〇）により「北海道笹類の研究」と題して、詳細な記述を行なった。竹の形態、解剖ならびに生理については、竹内（一九三二）の「竹の研究」に集大成された。竹林栽培については坪井伊助の貢献が大であり、これにより氏は藍綬賞をさづけられた（一九一六）。

さらに科学的考察時代にはいと、竹の研究は各部門にわたり集大成されたが、その主体をなすものは分類学であり、形態、生理ならびに利用に関する研究面では、ほかの植物に比して時間的ずれがあるのはいなめない。

§
つぎに、竹類の一般的特性について述べる。

まず稈についてみると、竹、笹類は樹木に比較すると伸長生長がいちじるしいが、その原因は茎の先端の生長点のほかに、節ごとに節の真上に生長帯を有するためであって、若いモウソウチクの節は一日に八八センチも伸長する。

小清水卓二らは、節の生長ホルモンについて多くの実験を行ない、節の節間部においては各節間とも独立的に生長ホルモンが下向き移動をすることなど、生長ホルモンとの関係を明らかにした。節が生長してできた稈の高さは、竹の種類、立地条件などにより異なる。日本ではモウソウチクが最高で直径二五センチ、高さ二五メートルのものもある。節数の同じものを比較すると、節や節間に異常のあるものは正常のものに比し、丈が低くなる。

つぎに葉についてみると、俗に竹の皮といわれている稈鞘は一種の保護器官であって、節の生長の途中で稈鞘を剥くと、稈は軟らかいので節は倒れる。またこれを剥くと、生長帯に光があたり伸長が抑制されるため、節間が短いままで生長がとまる。また稈鞘は、竹の種類により後になって離層形成が起り、稈鞘が離脱するものと、しないものがあり、この性質は竹類分類上の指標とさ

れている。

わが国では、古くから笹の葉で食べものを巻くことが行なわれている。笹の葉は、わが国では昔から魚毒を消すといわれていた。それで生魚を使う寿司のようなものでは、そうした意味で笹の葉は必要かもしれない。しかし今日では生寿司には笹の葉を用いず、プラスチック製の葉が使われている。これは経済的理由によると思われるが、まことに味気ないことはなほだしい。また、笹の葉から造った粉を酒の中に混入して、サルチル酸の代わりの防腐の用に使った記録がある。防腐剤を笹の葉からつくったのは、チマキにヒントを得たものらしい。このように、食べ物を笹の葉にくるんだのはチマキのほかに、京都のチゴ餅、伊豆のタウキビ餅などいろいろある。

さらに竹を利用の面からみると、もつとも重要なのはいうまでもなく節である。食用として節を利用してゐるのは、つぎの種類である。まず竹としてはホテイチク、マダケ、キッコウチク、モウソウチクであり、笹としてはカンチク、ネマガリザサなどである。節のうま味はアミノ酸の一種であるチロシンであって、節の鮮度が落ちるとうま味はエグ味にかわり、色も黒くなる。稈鞘の白さは、節のうま味を示す、パロメーターである。節を皮のまま茹でるのは、稈鞘にふくまれている亜硫酸塩の作用で、繊維を軟かくするためである。

府県では節の経済栽培が行なわれているが、市場性のあるものはモウソウチクの種類だけである。節は春の食品であるが、ホウライチクなどは夏から秋末まで節が出る。ホウライチクは火なわ銃の火なわをつくるのに用いられたので、徳川末期には半強制的に民衆にこれを植えさせたことがあり、いまでも九州や四国にその遺物がみられる。

戦後、食事の改善と中華料理の普及に伴い、芳香のある干節がさかんに製造されるようになった。材料にはモウソウチク、マダケ、ホテイチクが普通に用いられ、熊本ではさかんに製造されている。干節は、出盛りの節を切りきざみ、一度湯がいてから天日に干し乾したものであるが、天日乾燥したものはビタミンDの含量が多いとされている。

つぎに有用竹類の利用に関する面をみると、まず竹笹類の材は古くから木材

と異なる形態性を生かし、裝飾的に、建築、工芸方面への利用が多い。良い竹稈として具有すべき条件としては節間ごとの曲折が少ないこと、節間が三五センチ以上で割裂性が良いことがあげられる。つぎに栽培上の見地から、上記の良い竹稈を生産すべき要件としては、施肥した竹は虫害をうけやすく、竹が軟弱であるので、人家附近のものより堤防、山地のものがすぐれている。

また、伐期からみると、五月と七月に伐竹すると材の中に糖分が多く、虫害をうけやすく強度も落ちるので、九月と十月に伐竹したものが良いとされている。

工芸品をつくるには伐竹期によって使用の適否、色の明暗が左右される。最適の伐期は九月と十二月とされている。

日本産竹類のうちで材があらゆる点ですぐれ、もっとも広く栽培されているのはマダケで、竹林全体の七割、ついでモウソウチクは二割にあたる。後者は、筍を食用にするため近年盛んに栽培されているが、マダケの竹材工芸にくらべると三分の一弱である。第三位はハチクで、本種は耐寒性に富むことから、本邦の山間地帯に多く栽培され、主に筍の生食用とされ、また、材が細かく割れることから、茶栓のような特別な用途がある。

また、竹材の輸出先の主なる国はアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ベネズエラおよびメキシコその他で、製品としては釣り竿、竹籠、竹すだれ、筍の缶詰、乾燥筍などで二十億円に達している。また現在、日本の竹材生産量は五十四億円に達している。この額は現代日本の産業生産高からみると決して多額ではないが、今後竹製品の復興、発達、輸出品の増加と相俟ち、適種適地により各品種に新しい栽培地を拓いて利用面を拡大するならば、農家経済の更生に貢献するところも大きいであろう。

このように日本の府県においては、その自然風土の構成上、さらに人心の精神面で、さらには産業に日本人の生活上に占める竹の位置はけだし大なるものがある。これに対し、本邦の自生笹類として広く分布しているネマガリザサは、北は樺太、千島から北海道を経て本州の脊梁山脈に達している。かくして北海道的風土のなかでササ類の役割りは、本州における竹類に比すべきものである。

§

筆者は先年、北海道北端オホーツク沿岸の動植物の棲息状況、地形地質、海岸景観などの総合的学術調査に行きとにもすることができた。その調査によると、稚内より紋別にいたる道北オホーツク沿岸、とくに宗谷岬一帯の地域は冷涼な気候条件に由来して地形はなだらかな起伏を画きながら、この地帯特有の茫洋とした景観を形づくっている。その主役をなすものがチマキザサであり、そのなかにエゾカララナデシコ、ガンコウラン、エゾゴゼンタチバナ、コケモモなどの高山および寒地性植物が大小の群落をなして出現し、特異な景観を構成していた。

このように、チマキザサが優占種となつて構成する北海道北端の稚内近郊の景観は、かく独特の植物的風土を形成するとともに、この地帯の住民の精神にも大きく影響しているであろう。さらに、この地帯に毎年訪れる多数の観光客は、日本のほかの地域で見られない茫洋とした植物景観に心うたれ、自然へのあこがれ、府県では見られない北海道的風光に驚嘆するであろう。

このように日本のそれぞれの地方の自然から受ける人間の感覚は、それぞれの地域で異なることは当然であり、だからこそ日本の各地帯がもつ特異の自然を保護し、さらにそれを積極的に育成する義務をわれわれはもつ。これがひいては国民に、とくに若い青少年の精神的風土を豊かにするうえで、重要なことであろう。美しい国土の保全なくして国民が自然を、国を愛し、世界の平和をねがう気もちは育成されないであろう。

私はベトナムの竹の踊りを見ながら、竹につながるいろいろのことがらを偲びつつ、人間の心と与える自然の影響は、国、民族を越えて共感するものがあることを覚えた。

追記……本文を草するにあたり、竹内叔雄氏、室井綽氏、その他の竹に関する著作を参照した。

(北海道大学農学部教授)